

振り返ると今年は異常気象だった。真夏日が過去最長だと思ったら、日本に上陸した台風が一〇個と過去最高の数にのぼり、各地で甚大な被害をもたらした。それに加えての新潟県中越地震。被災された方々にお見舞いを申し上げるとともに、文化財の現状への危惧の念を禁じ得ない。とりわけニュースで被災地として、木簡出土で知られる地域の名を聞くと、本会がお世話になつた方たちは大丈夫だろうかと心配になる。

もちろん人命第一だが、被害は木簡をはじめとした文化財にも及ぶ。資料館なども被害を受けており、深刻な状況である。災害時における歴史資料の救済・保全を図る活動が各地で活発に繰り広げられている。木簡の研究のみならず「保存を推進する」ことを目的に掲げる本会として何ができるかと、検討すべき課題であろうし、会員の皆さんもそうした際には是非情報を寄せていただきたい。何しろ異常気象は今年だけではなく、毎年のように言わわれているのだから。

さて、本号には九四件の新たな出土事例を載せることができた。過去最高の件数である。しかしこのうち二〇〇三年出土のものは約三分の一。それ以外が圧倒的に多くなつたのは、『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』編集の成果である。刊行されている膨大な報告書

を博搜するなかで、これまで本会として掌握していなかつた、多数の埋もれた木簡情報を「発見」した。これまでも木簡出土事例は、すべて把握し本誌に掲載すべく努力してきたつもりだが、未掲載の木簡出土事例が二二七遺跡三一九件にものぼり、驚かされた。

そこで各地の関係機関に執筆をお願いし、今回そのうち六〇遺跡七七件を載せることができた。今後とも、残りの事例の掲載に努め、文字通り全木簡を網羅することを目指していきたいと思うが、聞くところによると、同書刊行後も多くの木簡情報の「発見」が続いているとのこと。掲載が追いつくのはそう簡単ではなさそうだ。

七七年以前出土木簡には、平城宮跡出土木簡とともに、木簡学史上著名な払田柵跡出土木簡が入っている。論文は昨年度の研究集会で報告のあつた、中央アジア出土のチベット語木簡と、明日香村石神遺跡出土の具注暦木簡をテーマにしたものに加え、「参」の二つの字体の使い分けを、正倉院文書や木簡から摘出した論考である。ところで毎号本誌の編集実務に実質的にあたられるのは、奈良文化財研究所員の委員・幹事である。本号では山本崇氏が献身的な働きをされた。『総覧』も山本氏を中心で編集された。その時に培われた各地の調査機関・担当者との繋がりが、本号の編集にあたつても大いに生かされた。氏ならびに編集を助けられた委員・幹事・事務局の方々の奮闘と、奈文研の協力により、本号は刊行されたことを明記しておきたい。

（館野和己）